

熊野の
木林から

怪熊野

「ヤロカ水」
其の三七

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



2011年の紀伊半島大水害での土石流。もっと迫力
在る写真を持ってはいるが、被災者の心情を考えると、人に直接害を与えなかった写真しか使えない。

その昔、龍神村の小又川にたくさんのヒヨウ（日雇
い労働者）が仕事に入っていた時、飯場のカシキ（炊
事係）が山ノ神様に飯を供える際、お経を知らな
かったため「般若心経」とだけ唱えて拜んでいた。あ
る晩ヒヨウ達が寝
ようかという時、
小屋の外から「ハ
ンニヤシンギョウ出
て来い」とオメク
（喚く）者がある。
皆が恐がつてその
カシキを外へ押し
出した。カシキは

誰ともなしに導か
れて自分の家まで
戻った。その後、何
処からともなく
「やるぞーやる
ぞー」という声が
聞こえる。ヒヨウ達
が面白がつて「や
れ、やれ、やれ」と
怒鳴り返すと、大
石がマクレテ（落ちて）きて小屋を押し潰し、皆死ん
でしまったという（十津川村の村勢要覧より）。

ヒヨウ達は、山の自然を荒らしたために山ノ神様
の怒りをおかしていたことで落石あるいは土石流の被
害に遭ってしまったが、信心深いカシキだけは助かっ
たという話だ。
この話には、特に題はつけられていないが、柳田國
男が『妖怪談義』で紹介している「ヤロカ水」の話と
似ている。「ヤロカ水」は、「ヤロカヤロカ」（欲しいか
欲しいか）という声が川の上流から聞こえてくる。こ
の声に答えて「ヨコサバヨコセ」と叫ぶと、瞬く間に川
が増水し、村は一瞬のうちに土石流に飲み込まれ
たと云（い）う話だ。「ヤロカヤロカ」は土石流の初期



2016年の異常気象は、春に大風を頻発させるだけでなく、
様々な生きものの季節変化に異常を与えた。写真は4月
に撮影したビワの実。例年は6月だ。温暖化が深刻な問題
であることが誰にでも分かるような時代になってきた。

段階で川底を岩が流れ出す時の音のことだと考え
られる。あるいは、巨石が動き出す際、まずは小石
が落ちてくるが、その予兆の音かも知れない。異変
があつたら逃げるのが適切だが、「ヨコサバヨコセ」と
甘くみていると被害に遭うという訓話であろう。

紀伊半島では平成23年9月に大水害が発生し
た。その苦く辛い経験は今も生きていたろうか気
になるところだ。そんな人間の防災意識とは関係な
く、今年は春なのに大風が頻繁に発生し、いろんな
場所で大砂崩れが起きている。この風の多発の原
因は、温暖化問題と関係していると考えられる研究
者は多い。それが本当なら、温暖化は未来への不安こ
となどではなく、既に今を生きる私達に対する脅威
になっている。本腰を入れて対策することが求めら
れる。いや、孫子のためには義務なのではないか。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大
学大学院生物資源研究科博士後
期課程を修了。平成8年から和歌
山大学システム工学部講師。12年
から助教授。19年から教授。51歳。
専門は森林生態、自然再生、砂漠
緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネ
ルギ、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊
野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

